610

特255
805

思想的維新の提唱

日本精神とカトリク教

3
4

始

特255
805

思想的維新の提唱

日本精神とカトリク教

昭和一〇・四・一四

Nihil obstat.
Paulus Matsukawa
Datum Nagasaki, die 3 Januarii 1935

Imprimatur
die 3 Januarii 1935
+ Januarius,
Episcopus Nagasaki.

日本精神とカトリク教

目次

現今國際危局……一
一、分れ爭ふ國は亡ぶ……三
日本精神……六
傳統的な一大信念……八
神樣を信ずるの宗教心……九
所謂神樣たちの戸籍調べ……一一
最高にして且つ最美なるもの……一三
我カトリク教の存在が有つ……一五
セザルのものはセザルに返し……

二、カトリク教とは果して如何なるもの……一六
それ等を造るに就ての理想……一七
神は眞實に在す……一九
已が心を直觀する……二一
人間の人間性其物……二三
神御自身の活ける御詞……二三
人類が神造物主に奉仕するための道……二五
萬物に法則あり……二六
宇宙は謎だ、不可解だ……二八
唯一絶對であらねばならぬ……三〇
造つたものが一つだから規則が一つ……三一
三、第一神樣を信仰する事だ……三二
神の聖なる權利の……三五
第二我日本精神の觀念內容として……三六
靈と肉との合せ物……三七
最善の死は最善の生命への進出だ……三八
勢力の混亂と……四一
思想的混亂と紛糾とより……四一
そが祭祠祝典を營む……四三
我等の日本精神とは……四四
我等の思想的維新……四五
舊來の陋習を破り天地の公道に基づく……四六
附錄に序して……四七
附錄　思想的維新に到るまで……四九
（二）世界歷史中の最大傑作……五〇
（三）高天ヶ原の神話……五一

(四) 神孫現神……五二
(五) 儒道外來思想……五三
(六) 佛　　教……五五
(七) 弱小思想の汎濫……五六
(八) 思想の統制……五七
(九) 民衆福祉の公正原理……五九
君民一如、上下一心……六〇
(一〇) 明治維新の遺漏缺陷……六一
(一一) 精神の啓發期……六三
(一二) 八百萬神の神籍奉還……六六

現今國際危局

を前に、國民相互の疑心を排し、總意協力以て國難に當るは、吾人の義務なりと信ずる。

日本民族に對する

世界列國の認識不足、カトリク教に對する日本國民の認識不備、一は東洋の平和を脅かし、一は國民相互の協調を破綻に導く。

「俺はカトリク教は嫌ひだ！」

と云ふ、「何故です？貴方はカトリク教を知つて居られるか？」と訊ねて見る、「否や其れは知らんがなあ！」知らぬが儘に嫌らふ！

聰明な同胞に、此れは亦何たる錯誤だらう！

古へ

武士階級の不心得者があつて

「俺は土百姓は大嫌ひだ」などと怒號した、而して百姓と云ひ、農民と呼ばれるものこそ、實は國の寶だと知らなかつた。人間は案外、嫌ふに當らぬものを嫌ふと云ふ癖がある。

「分れて爭ふ國は亡ぶ」

とある、一致團結こそ力だ、「話せば分る！」とは、犬養翁の辭世である。我等は互に胸襟を披ひて、許し合つて、斷々乎として國難に當らねばならぬ。

日本精神とカトリク教

佐世保市公會堂に於ける講演（昭和九年十一月十七日）

（一）

分れ爭ふ國は亡ぶ

今夕私は斯く多數のお方々が、御參會下さつた事を見まして、我同胞、我日本人はまことに懷かしい國民だ。實に話せる國民だと云ふ感じに、胸も躍る心地がします。『凡て分れ爭ふ國は亡ぶ』とあります、即ち國民が互に分れ〳〵に爲つて、爭つたり、憎み合つたりしたのでは、國は榮えない、特に今日我國は、國際危局を前に控へて、全世界を對手に幾んど孤立無援のまゝ敢然と突つ立つて居ります、斯かる時、我等九千萬同胞は、皆な胸襟を披き、皆な許し合つて、一致團結せねばならぬ、而して互に手に手を執りて國難に當らねばならぬ、而も我日本國民に對する世界列國の認識不足よりして東洋

の平和が壞されたやうに、カトリク敎に對する日本國民の理解不足なるより、國民同士の協調團結が破れるやうであつてはならぬとの見地から、今回は一つカトリク敎の話を聽いて戴き度いと、皆樣のお出を願ひましたる所、諾それでは聽いて遣らうと、斯く大勢引連れて、茲にお集り下さつたその美はしい雅量、此ればかりは我日本人でなくてはと云ふ感じを、沁々と味はされる次第で御座います。古人は、

『人によりて言を廢せず』

とか申して居ります、即ち言ふ事が正しい場合、言つてる人が誰であつても、たとひ自分の氣に入らない人であつても、それを聽棄にすべきでないとの意かと存じます、たとひ敵からでも正しい事なら聽いて置かうと、云つた樣な大きい度量を有つて居ませばこそ、我國民は向上もし、進歩もするのであります、實際此れまで儒道だの佛敎だのと申しまして、支那人や印度人の言ふ事でも、神妙に聽いて來た日本人なのであります、「話せば分るから」と曰ふものを、耳も藉さずに遣つ付けて了ふ樣な、性急な、亂暴な仕打は、決して日本人の本幕の姿ではありません。

偖而今晩私は『日本精神とカトリク敎』と云ふ事に就き、少々御話申上げ度いので御座います、日本精神とカトリク敎—科學者などは、空氣と熱だとか、空氣と植物だとか、更に空氣と人間乃至動物だとか、云つた樣な關係を明かにしまして、万物は皆な其れ〳〵巧妙な關係を保つて居る事を敎へます、同樣に、日本精神と神道、日本精神と佛敎、更に日本精神とカトリク敎と云ふ如き關係を究めますると、我日本精神と云ふものの融通無礙、具足完備の姿が、彌々鮮明に、且つ難有く仰がれて來るので御座います、日本精神とは決して日本國民が互に分れて爭はねばならぬ樣な、そんな偏屈偏狹なものではありません。

日本精神！

皆樣、我日本は日本精神あるによりて生きて行くのであります、日本精神とは何であるか、六ヶしい御說明を申上ぐる迄もなく、事實を御覽下さるが早分りだと存じます、去る九月初旬（昭和九年）滿州國の北鐵南部線に於きまして、ハルビンと新京の間を走せて居た列車が、突如匪賊の襲擊に遇ひ、多數の死傷者を出しました上に、日米人八九

名の人質を拉致された事件は、未だに皆様の御記臆に新たな所でありませう、その時、右の拉致された人質を取戻すべく、捜査隊が差向けられましたが、匪賊の輩は、捜査隊が近づいたと知るや、人質を縛めて皆な之を舟倉に匿し、而も拳銃をその咽首に突付けて、聲を立てたら直ぐにも之を射殺すべく、手筈を決めて居たのであります、之がために捜査隊は、そこに人質が居るとも知らず、行過ぎて了はふとしたその時、村上彖太郎と申す人質の一人は、こゝで捜査隊を遣り過しては、人質のもの全員が救はれる機會は、二たび來ないと見まして、自分の咽首に銃口が向けられて居るにも拘はらず、大音を擧げて「日本人は茲に居るぞつ」と號はつたのであります、號はると仝時に、向けられてあつた銃の引金は引かれ、村上氏は下顎を射拔かれて、瀕死の重傷を負ふた事勿論でありますが、而も村上氏は、己が身を殺しても、他の人質のものを救つて上げ度いと、呼べば殺されるのは覺悟の前で、「日本人は茲に居るぞつ」と大音を擧げたのでありまず、加之村上氏は、下顎を射拔かれた刹那、最早助からぬと見て、「天皇陛下萬歳！」と、二たびまでは叫びましたが、三度目には早や重傷のために聲を出す事が能きませ

ず、迸り出る鮮血に指を染めて、己がズボンに太々と「天皇陛下万歳」の六字を認めてあつたと申します、おゝ皆様、此れぞ實に我日本精神の生きた姿ではありませんか、即ち我等日本人が、上、　天皇陛下のために、及び下、同胞の救ひのために、自己を犧牲にして悔いざらんとする心意氣、此れぞ正しく日本精神に外ならない、應に自我を殺しても隣人を活さう、己れは仆れても隣人を立てよう、己が敵にさへも、友の名に於て善を施さう、生命を捨てゝ上げようとある、聖徒的愛の具體的な姿其物ではありませんか。

更にかの上海事變當時を回想して御覽下さいませ、當時世界列強の我國に對する、正に虎視耽々と云ふ容易ならぬ情勢でありました、特に滿洲問題が彼あした成行に置かれてあつた關係もあり、隙だにあらば、否や無理に隙を構へても、我國を何とかしよう、取つて押へようとして居たものであります、然るに我帝國軍人たちが、全く人間業とも思はれぬ忠勇義烈の大勇猛心を發揮しまして、夫こそ實に獅子奮迅、或は敢然と身を挺して砲彈の山、地雷の丘に肉迫するがあり、或は自から爆彈を抱き乍ら塹壕に飛込んで、敵陣を紛碎するがありと云つた樣な、壯烈無比な働を爲して、世界列國の心膽を寒

からしめたが爲めに、彼等は自づと愼重な態度に止るを餘儀なくされたのであります。斯くも氣魄旺んな日本を對手に事を構へては面倒だと、手を控へるに至つたのであります、茲に我日本精神の眞價は、遺憾なく發揮されたと謂はねばなりませぬ。

什麼して我日本の軍人たちには、斯かる偉大な力があるか、この忠勇義烈なる日本精神の基づく所、果して何でありませうか、

皆樣、我大和民族の魂の奥底には、三千年來培かはれ來つたる

傳統的な一大信念

があります、それと云ふのは、今更御說明申上げます迄もなく、我建國の由來たるや、一に天意に出で、そが統治者にます皇室の大權は、天授神聖にして犯す可からざるものだとの、國民全體の總意的信念此れであります、この國民の總意的な大信念こそ、實に寰宇無比の我國體をして今日あらしめたものであり、日本精神と云ひ、日本魂と云ふものを、何千年に亘りて培かひ來つた所のものなのであります。

國を建つるに就きて、之を神樣より出る大權の上に置くと云ふは、それは一方神樣に對する信仰の宣言であると同時に、亦一方、國家の權威をば絕對的のものとして價値づける所以に外なりませぬ、神樣が居られる、而して神樣の權威其物が、我君の上に宿つて居られる、故に我君に對する服從や忠誠には、寸毫の隙もあつてはならない、物と云はず、事と云はず、生命も、存在も、すべて神樣のものゆえに、神樣の權威の前には、すべてを犧牲にし、すべてを投げ出すが當然だ、「生死何物ぞ、我等はたゞ神樣の聖旨のまゝに、身命を賭して神樣の權威に殉せねばならぬとする、茲に我等の軍人たちが、最後の瀨戸際までも、天皇陛下萬歲！を高らかに呼び奉りながら、神樣よりの權威者を祝福しつゝ、一死君恩に報ずる所以の根本心理があるので御座います。

加之、斯樣に神樣のために死んだものは、死んでも死なない、死んでも亡びない、神樣と共に存して永久に鎭護國家の鬼と爲る、所謂七たび生れて國賊を滅せんと云つた樣な、不壞不滅の信念が生れる、そこに我等國民が、祖先崇拜を重視し、戰死者の慰靈祭であるとか、招魂祭であるとかを勵行して、ひたすらその及ばざらんことを恐れる所以があるので御座います。斯樣に國民に

神様を信ずるの宗教心

があり、而して我國家の主權と仰がれる所のものが、神様の大權其物に外ならずとの信念が、國民の心底に儼として存する限り、國家の將來は實に安全です、天地崩るとも、我國家は崩れはせんと、斷言して可い位でありませう、斯かる意味に於て、我國は何處々々迄も神國であらねばならぬ、神様の御國であらねばならぬ大切な道理因緣が、結ばれて居ると謂はねばなりませぬ。

然るに異な事には、今日この神國に、神様とは丸る切り正反對な無神思想や、唯物主義などが、次第に横行濶歩と云つた有様ではないか、特に國民の知識階級と稱せられて、自ら先生顏して居られるお歴々、帝大出の秀才であるとか、高等學府の先生たちであられるとか云ふ様な方々ほど、神様の觀念に薄く、信仰心が朧ろだと稱せられます、什麼して恁んな事になるか、御承知の通りに、人間は智慧を有つて生れますが、然し七八才あたりまでは、その智慧が働かないで、幾んど親や他人の言ひなり次第に爲つて居ります、所が年齡の十四五、十七八にも爲ると、各自の知慧が物を言ひ出すので、さう

他人の言ひなり次第にばかりは參りませぬ、況んや三十四十の年取上げましては、この新人に對して、親や老人たちでさへ一目を置いて遣らう、讓るべきは讓らねばならぬと云ふ事になる、恰度そのやうに、國家や社會や云ふものに在ても、此れまでの歴史に徵すると、或時代までは、民衆の智慧は余り働かない、一部少數者の率ゐ行くがまゝに、言ひなり次第に爲つて居る、然るに社會文化の程度が、漸次發達し行くに伴れまして、やがて民衆全體に智慧が普く行廻つて來る、而して皆のものが、所謂學問をして我手で以て科學や哲學やと云ふ、高級な材料を取扱ふやうになる、すると我々の祖先が、風の神様だとか、雷の神様だとか云つて居たものに就きて、今日科學書を讀んで見ると、その風の神様と云ふは、たゞ空氣の流動する一現象に過ぎない事が分る、又雷様と云ふのは、たゞ電氣と電氣との接觸か生ずる一現象に外ならぬ事が分つて來る、山の神様然り、川の神様然り、更に海の神様然りと云つた様な鹽梅で、折角の神様たちも、現代の學的權威の前には、到底神様としてのお役が勤まらぬ、そこに

所謂神様たちの戸籍調べ

など云はれる要求が叫ばれ、極端なものにもなると、凡有る神々を否定して、無神主義や唯物主義を担ぎ廻りながら、今更神樣を信仰する如きは、文明人や學者たちには、體面問題だとさへ考へられる傾向を生じたのであります。

それに亦油をそゝぐべく、かの西歐特に獨逸あたりから、カント、ヘーゲルなどの唯物論、進化論乃至はマルクスの經濟論などが、輸入されまして、物質以外の神も、佛も、人間の靈魂も、何もかも存立しないものにして了つたのです。然うした結果が、人間の精神生活の殆んど全部を、破却して了ひまして、今日の所謂赤や桃やの危險思想、惡思想をば、傳播し、培ふ事に爲つたのであります。

所が、この無神、唯物の主義思想が、我國家社會に蔓つた曉、果してどんな結果になるかを、考へて下さいませ。例へばかの國難に殉じた我忠勇な軍人たちは、何のために死を鴻毛の輕き思ひして死なれたかと云ふに、それは第一、神樣より授かつた、我が尊嚴なる皇室の大權を、擁護し奉らんがために死んだのであります。第二、我等の祖先が心血を注いで、築上げて呉れた國家に疵を付けては、祖先の靈に對して申譯が立たぬとあつて、身命を投出したのです、夫れなのに今、無神論だ、唯物論だとあつて、神樣などは居ないぞ、祖先の靈もあつたものか、自分の魂さへありはせんぞと、云つた樣な事に爲つて見なさい、折角軍人たちの名譽の戰死なるものも、その謂れがなく、神樣よりの大權を重んじ、祖先の靈を思つて死んだのは、空しい事だつた、犬死をしたに過ぎなかつたと云ふ事になる、此れこそ實に我國民の所有し、誇りとする所の

最高にして且つ最美なるもの

を侮辱し、冒瀆する所以ではありますまいか。

皆樣、今日我國上下の最大の憂を爲して居ます所の、危險思想、思想國難と稱せられるものゝ正體は、正しく此れであり、而して之が最大原因は、全く右の無神主義及び唯物主義の人生觀や、社會觀に根ざして居る事を知らねばなりません、不幸にして此等の主義思想が、我國の中等、及び大學などの最高學府に於て、誤れる科學や哲學の名に於て、敎へられ來つたが爲めに、宗敎を信じ、神樣を念ずるが如きは、無知蒙昧な民衆に

限るかの如くに、思ひ做された所から、俺は無知蒙昧な民衆ではないぞと言はんばかりに、然うした無神的、唯物的な主義を鵜呑みに、附和雷同する連中が、次第に多く爲つて來たのであります。この誤まつた思想觀念の是正こそ、實に我國現時の危機を救ふ所以であり、我カトリク教徒たるものの重大なる使命天職の在つて存する所だと信ずるのであります。

皆樣、我等の神國、即ちこの神樣の國を活すのには、その神樣の觀念が、清淨且つ刻明に保たれねばなりませぬ、我等は神樣を信ずる事によりて、始めて神國の民であり得べき筈です、とは云ひながら、神樣も神樣次第だと申しませう、即ち學問をした國民には、如何なる神樣が神樣として崇拜されようかと云ふ事であります。八百万の神々の集團的な威力も、現代科學の前に影薄くなり、雨の神、風の神、雷神、金神など稱せられたものも、器械科學の藥籠中のものと爲り了つた今日、油斷をすると、民衆は凡有る神々を見棄てゝ極端な唯物觀や、唯理唯心の無神、無靈魂主義に雷同せんも、測られない情勢に在る、さあ什麼して之を救つたものかと、國家を憂ふる人たちは、その方法を得

ずに、實に苦心慘憺の有樣であります。救ひ度くても救ひ度くても、救ふべき術を知らないで、惱み拔いて居るのであります。斯かる場合、

我カトリク教の存在が有つ重大な意義

に就き、聰明なる同胞諸君の御留意、御關心を喚起されんことを、お願ひし度いのであります。否や御留意は之を喚起される迄もなく、今日我國民の間には、寧ろ神經過敏と思はれる位、このカトリクなるものに對して、警戒の目を睜つて居られるかに見えます。ツイ數日前の新聞にも、奄美大島あたりで、カトリク系の米人スパイが暗躍してるだの、島民のカトリク信徒が國防意識に目醒めて、十字架を燒いて轉向を誓つただのと、素晴らしい報道が飛出して來たのですが、如何にも今日かの米國などが、事毎に我日本に楯突いて、特に滿州問題以來、上海事變、國際聯盟、更に今回のロンドン軍縮豫備會議などを通じ、連りに自己の優越權を維持するに汲々として、幾んど國際信義、國際儀禮をさへも辨へない得手勝手な言動を爲すに對して、極度の憤懣を感じてます我國民が

偶ま米國系の宣教師だと目せらるゝ人たちに向つて、內心穩やかであり得ないと云ふのも、無理からぬ事とは云へ、それが爲めに、何も米國や英國などと、因緣關係のあらうとも思はれぬカトリク教に對して、如何にカトリク教を御存知ないとは申せ、不穩な言動や振舞をするなど、抑も大國民たるの襟度を忘れた仕打ではありますまいか。

無論宣教師だらうと、或は傳道者だらうと、若しも彼等が、事實その宗教家たるの本分を忘れて、何等か國家に對し非違の行動があつた場合、（如此きはカトリク者に限り有り得ない事と信ずるが）それは固より斷乎たる處置を執るに、躊躇すべきではありません。かの有名な碩儒山崎闇齋先生が、その門人たちに「君等は孔孟の教を學んで居るが、今ま誰かが孔子を大將とし、孟子を副將として我國を來り侵さば、如何にするぞ？」と訊ねたに對して、門人等は答へが能きなかつたので、闇齋先生は「何に躊躇する事があるか、その時こそ、我黨の士は兵刃を執りて立ち　孔孟を擒（とりこ）にするばかりだ、此れが乃ち孔孟の道である」と喝破されたとありますが、今日世人は、我等カトリク教徒に向つて「若しカトリク本山のローマ法王か、日本を攻めに來たなら、如何するか」と云ふ樣な珍妙な問をするのを耳にしますが、それなら闇齋先生が私たちに代りて、遠つくに返答して呉れてある。即ち我黨の士、日本カトリク教徒たらんものは、劍を撫して立ち、法王を擒にするばかりだ、此れが乃ちカトリクの教であると、申上げる外もありません、實際基督は

セザルのものはセザルに返し
神のものは神に返す

べきだと仰有つて、國家と教會、政治問題と宗教問題との間には、截然たる區別を置いて居られるのであります。

今更申上げます迄もなく、我等は生きても枯れても、斷じて日本人であります以上、かの歐米などにかぶれて、カトリク教徒などに爲りはしません、明治維新の際、長州などは朝敵の汚名を被（き）せられて、官軍の討伐を受けた位でしたが、然し遺（さすが）がにかの大西郷の如きは、長藩と結んで薩長共に起たなければ、維新の大業は遂げられない事を達觀して、大局の上から兩者の和合を謀つたものであります。この大西郷の心掛けがあつたな

らば、今日我國の精神的維新を完成しまして、その國體信念の上に、万世不變の基礎根底を與ふべく、此れまで高天ヶ原の神託に言寄せて、培はれ來つた日本精神の上に、更に正しき科學と哲學との宙宇觀的背景を具へたカトリクの大信念を配すべき必要ある事を、看取するに難くはない筈であります。

（二）

されば

カトリク教とは果して如何なるもの

であるか、那處に我日本精神がカトリク教に俟つべき所があるか、少々カトリク教の概念を述べまして、然後その日本精神及び日本國體との關係を、御説明申上げ度いと存じます。

抑もカトリク教とは、凡て有神思想、即ち神樣ありとする凡有る主義、信念、宗教などの中に在て、その最も尤なるもの、所謂醇乎として醇なるものであります。それはかの科學や哲學の名に於て否定されねばならぬ樣な怪しげな神樣の代りに、却てその科學や哲學の貴とき名のゆえに確と認められねばならぬ眞の神樣をば、啓示し、宣明する所の宗教であります。それは又た今や近年に始まつた人爲的な宗教ではない、即ち人間の工夫や思惑から編出された宗教などと差つて、人類の始元、神が人間をお造りに爲つたその時、人間の魂に刻み付けて下さつた、所謂天賦の道であります。古人が天の賦ふる之を性と云ひ、性に隨ふ之を道と云ふ、とあるその道なのであります。

元來人間の道を人間が作るなど云ふ事は、間違つて居る。凡そ物の道と云ふは、その物を造るものから當がはれるが本筋であります、たとへはかの茶椀を作る人を見なさい、花瓶を作る人を見なさい、或は椅子や卓子を作る人を見なさい、それらを造るには、

それ等を造るに就いての理想

と云ひ、目的と云ふものが、ちあんと造る人の頭に存してる筈です。何のための茶椀だ、何のための花瓶だと、其れだけの理想があつて、其れだけの品物が出來る、出來た

品物はその理想目的に添ふやうに使用されねばならぬ、そこに品物としての存在の意義があり、品物其れ〳〵の道がある。從つて物が出來たときは、既に物の道は具はつて居なければならぬ、神樣が世界万物をお造りになるに就きても、やはり神樣には神樣だけの御理想が、お考へがあつた筈です。何のための万物ぞ、何のための人間ぞ、寔に野の花の一つにも、路上に轉がつてゐる石ころの一つにも、神樣の御心は籠つてる筈です。況んや萬物の靈長たる人間に於てをやでありませう、その神樣が人間乃至万物をお造りに爲つた時の御理想、それを宗教的には、万物に對する神の聖旨、若しくは天の使命などと申します。從つて人間が出來たときは、既に人間の道は具はつて居た筈です。「離るべきは道にあらず」とありますやうに、まこと人間の道なるものは、人間から離れられぬもの、即ち人間と共に始まつて、人間の存する限り存續する、而も不變不動に存續すべきものなであります。たとへは水の法則を御覽なさい、空氣の法則を御覽なさい熱、光、電氣其他万物一切のものの法則を御覽なさい、其等一切のものゝ法則は、其等一切のものと共に始まつて、其等一切のものゝ存する限り存續するでありませんか、而

も不變不動に存續するでありませんか、故に學者は幾世紀、幾時代に亘りて、其等の法則を研究し、未來永遠にその法則に基づいて、建設を進め、巨萬の資を投じて大がかりな器械を作る事が能きます。反之、時代毎に万物の法則が變つて新らしく爲つて見なさい、その都度學問の基礎は動搖し、一切の器械工業は用を爲さなく爲り、一切の研學推究は徒勞に歸するでありませう、人間の守るべき道だつて全然です。若しも時代々々にその道が異つたならば、我等は古人の言行を仰ひで之に則るとか、祖先の遺訓や功績を想見して、自から感奮激勵するとか云ふ事さへあられなく爲るでありませう、だから

「神は眞實に在す」

と申すのであります。即ち神樣は御自分の眞實に顧みて、万物一切のものゝ法則をば、不變不動ならしめ給ふと仝樣に、亦我等人類の守るべき道をも、万古不變の大眞理の上に置いて、古今一切の人類が、その履むべき所を、誤らぬやうにして賜はつたのであります。斯かる意味に於てカトリクとは申します。カトリク！それは元々希臘語でありま

して、邦語では公と譯しカトリク教の事を公教と呼んで居りますが、そが眞意は、時間的に古今を貫き、空間的には全人類に及ぶと云ふ、所謂時空不斷、永遠性にして且つ全人類的宗教だとの意を表はしたものに外なりませぬ。

されば什ん風にその樣な教へが人間に與へられたか、それは何も面倒な事はありませんでした、即ち神樣は人間をお造りになると仝時に、各自の心と云ひ良心と云ふものに之が道を刻み付けて下さつたのであります。人間の心が初めて神樣の御手に造られました時、その心は實に天眞爛縵でした、無垢清淨でした、而して曇りなき明鏡に於けるが如くに、眞善美なる神の御像が、そこに判然と映つて拜まれるのでした、佛教あたりで申しまする所の「本然の心」だとか、或は王陽明などの主張する「良知良能」だとかは斯かる「心の純眞な狀態」に名けたものと見たなら、大差なからうかと存じます。若しも恁うした神樣の御手に造られた儘の純美な心の姿が、失はれないで居ましたなら、今日人間は己が道を知らうために、或は神樣の人類に對する律法や御旨を拜察しようために何も他に向つて教を請ふの要がなく、たゞ己が良心を一瞥するのみで、たゞ

「己が心を直觀する」

のみで（良心法）、澤山だつた筈であります。所が後日人間が罪に落ちた事によりて、その心が不良化し、惡化し來つたが爲に、而して私慾邪慾肉慾などの煩惱に覆はれて、この良心だけでは、人が人としての道と云ひ、本分と云ふを、充分に見透し得られなく爲りましたために、神は之が補全策、或補照策として、かの十誡と稱する律法をば、御啓示下さつたのであります。それは固より單なる一部民族や、或はカトリク教徒など稱せられますものゝ爲めに、限定されたる新紀特設な法規などではありませんで、全人類がその個人的存在、或は社會的生活の爲に、必須缺くべからざる自然律、人道であり、最初人心の奥底に刻まれたかの良心法其物に外ならぬのであります。だからその十誡に所謂「神に信、親に孝、殺す勿れ、姦淫する勿れ、盗む勿れ、詐る勿れ」などと、聽されまするとき、我等は決してそれを我等の心以外のものとは感じない「何あんだ、其れ位の事なら、自分の心にだつて、ちあんと覺えがあるぞ、分つて居るぞ、辨へて居るぞ」

と云つた感じがある、この人間各自が、巳が中に、己が心裡に感じてる普遍性の道こそ、正しく我カトリク教に外ならぬのであつて、謂はゞカトリク教とは乃ち

人間の人間性其物

だと云つても過言ではありません、さあ斯樣に分つて見まするとカトリク教が日本精神若くは日本國體と相容れないなど、申しますのは、人間性が日本精神や日本國體と相容れないと云ふに同じであつて、此れ位野暮な、馬鹿げた話はあられない筈であります。

而も世が末世と爲り、人類の墮落が彌々深く爲るに伴れ、異端的な律法學士や、僞善的なファリザイ輩が出でまして、神の律法をさへ己が私慾邪慾と妥協させようとするに至りました。而して愛に代ふるに復讐を以てし、貞操に代ふるに離緣狀を以てし、神への献物に籍口して父母への孝養をさへ顧みない爲體に爲つて來ました。それは例へばかの自業自得を標榜した釋尊の自力精進の鐵則をば、末弟子の親鸞などが、勝手に稱名念佛の他力信心と置き代へまして、佛説と本能享樂との妥協を圖つたのと、仝一轍でありませう、恁う爲つては、所謂律法の權威なるものも、全く臺なしと爲りますので、そこに神は最早死せる文字の律法などでなしに

神御自身の活ける御詞

と呼ばれる神人基督をして、その福音を宣明させ、喚發させ給ふ事と爲つたのであります。

さて福音とは何か、それはかの神聖なる律法に、人間の私慾邪慾肉慾など云ふ、汚らしいボロが掛つたり、迷妄や虛僞や僞善やと云ふ、無知と惡意との拗みが出來たりしてあつたものを、最初神の御手に造られた儘の赤子の心に刻まれてあつたと寸分違はぬ、眞と美との光輝燦然たる聖き教、完き法、直き道と爲して、之を宣べ且つ傳へて賜はつたもの、此れが乃ち基督の福音、基督の御教なのであります。

然れば基督の御教へと云つて、それは決して基督に創唱められた新紀な宗教だとの意

ではない。天賦の道として人間性其物に刻まれてあつた所のものを、基督はその掲げた福音的光明によりて、人類が判然と讀み取れるやうにして下さつた、神の律法の眞意、眞精神を照破して下さつたと云ふに外ならぬのであります「我は律法を廢せんがために來たと思つてはならない、之を完うせんがためにこそ來たのだ」、「万事成就の日まで、律法の一點一劃と雖も、廢さるゝ事はあるまい」「天地は過ぎる事があらう、されど我言葉は過ぎる事があるまい」などゝ、基督は明確に、神の聖旨(みひね)より來る所の人類の道と云ひ、眞理と云ふものゝ不變不動なる所以、永遠性のものなる所以を、聲明し、宣言せられたのであります。

世人の多くは、基督敎と云へば、基督生れて始めて出來た新宗敎なるかの如くに、早合點し、誤解なさる嫌ひがありますので、我等は平素、基督敎と云ふ名稱よりも、寧ろ宗敎の本質に觸れたカトリクと云ふ名稱を使用する譯なのであります。

要するに宗敎とは

人類が神造物主に奉仕するための道

であるから、それは直接造物主の大御心から割出さるべき性質のもので、現時(いまゝ)輓近、人間などが新しき宗敎を發明すると云ふ如きは、實に非條理な、否や寧ろ滑稽な事態だと謂はねばなりませぬ、例へは子が親に事へる道、或は臣下が君に事へる道に就きて、考へて御覽下さい、子供や臣下が自分勝手に、己が是(ぜ)とする所を振翳して、親や君に事ふるとしたら如何でせう、親に對する眞の孝行とは、寧ろ子が自分の好みや思惑を離れて、親の志を成げさせる、親の意志を尊重してそれを滿(みた)して上げる所にこそ、ありはしませんか、又た臣下の君に事ふる眞の精神、眞の心掛は、君命惟れ奉ずるとあつて、やはり君主の御命令、御希望を主眼としたものではありませんか、だから人類が造物主に事ふる道と云ふも、それは斷じて人間たちが、その好み〳〵で編み立てたり、考案したりなさつた自我流の宗敎觀だとか、人生觀だとか云ふ樣な、間に合せ物では、何の意義をも爲さない、那處までも造物主の永遠の御理想と云ひ、御旨と云ふを背景とし、根據と

したものでなくては、宗教や人道としての權威は、あり得ない事明かだと謂はねばなりませぬ。

さてその樣な造物主、神樣が、今日の如き科學万能の時世にも、果してあられるゝかと申すに、否やそれは今日の如き科學萬能、科學全盛の時代なればこそ、この樣な神樣、この天地萬有の第一原因であらせられる所の造物主の存在が、斷然明確に證明されるに至つたのであります、什麼して？、それはもうこの天地萬物を研究しさへすれば、きつと分つて來る。この天地萬物を研究する學問を、科學とは申すのです、科學！ されば科學によりて、宇宙萬物一切のものを研究した結果は、何かと云ふに、それは

「萬物に法則あり」

との一大事實であります、萬物には法則がある、理法がある、たとへば水には水の法則と云ふがあり、空氣には空氣の法則と云ふがあり、光、熱、電氣、及び其等一切のものゝ運動等、皆な其れ〳〵一定の法理法則が具はつて居る。さてその法理法則とは、いつたい何のためにあるかと見るに、それは萬物を或一定の目的に向つて統制せんとする意志工作であり、理知の表現だとしか思はれません。即ち萬物を或目標に準じて計畫し、規定した姿其儘が、法則であり、理法であります。從つて法則と云ふものの内容解義、即ち實質的な意義を糾せば、法則乃ち知的計畫であり、知的計畫乃ち法則なのであります。故にこの宇宙萬物に法則ありと云ふのは、宇宙萬物には知的計畫がある、知慧の仕掛けがある。細工が施されてある、換言せば萬物は知慧で出來たものだ、知慧で造られたものだと云ふ事を、明かに認める事が能きる。否や認めざるを得なく爲ります。するとその萬物を造つた知慧は、誰の知慧か、神の知慧か、人の知慧かと云ふと、佛教あたりではそれは人間や萬物と同一體である所の「眞如」と呼ばれるもの、或は本體我、宇宙精神などと呼ばれるものの自然的な作用であり、發露であると、見ますので、無論それも一つの見解には相違ありませんが、然しこの萬物を統制せんとする宇宙精神と、人間などの知慧が同一體だとありますれば、この宇宙萬物一切の法則、一切の神秘が、人間などにも充分理解が能き、分別が付かぬばならぬ筈です。何故なら自分と同一、同程度な

知慧や能力で出來たものは、自分にもそれを辨へ、それを處置すること能きねばなりませぬ、所が實際は人間などで萬物の法則を幾ら學んで見ても、到底之が千萬分の一も學び盡せるものでなく、知り盡せるものでない、そこで所謂

宇宙は謎だ、不可解だ

奇だ、妙だ、魔訶不思議だ、玄之又玄だ、などと稱せられる事になる。此等は要するに、我等人間の知慧と、この宇宙萬物を計畫し、組織する所の知慧とが、全然別物だ、段違ひの知慧だと云ふ事を、うなづかせるに充分だと謂はねばなりませぬ、否やその知慧こそ實は宇宙六合に通じて、而も宇宙萬物一切の上に超絶する全知全能の造物主、この眞の神の無限知慧其物に外ならぬ事が、眞にロヂカルな結論として受取られる筈であります。

もつと簡明に申上げる事が能きます、人間は宇宙萬物を、科學即ち學問の對象とするその意味は、人間がこの世界萬物を已が知慧の材料にすると云ふに同じです。さて世界萬物が知慧の材料として取扱はれるには、その世界萬物が知慧の產物であらねばならぬ、即ち知慧で造られたものでなくてはなりませぬ、何故なら知慧に關はりなく出來たものは、到底知慧の材料たる資格はあられないからです。既に世界萬物が知慧で造られたものだとなると、この世界萬物ほどのものを造るに堪へた高大な知慧、世界大な知慧、否や世界よりは更に〳〵偉大な知慧が、而して亦その知慧の所有主(もちぬし)が居なければならぬ。何故なら、世界に存在、生命、及び組織を賦ふふる所のものは、世界其物を活かすに足るべき絶對無限の知慧で、存在で、生命であらねばならぬ道理だからであります。此れが乃ち宇宙萬有の第一原因、眞の造物主、眞の神樣に外ならぬのであります。

右は單に科學的觀點から出發した存在神の證明でありまして、更に之を哲學的及神學的立場から、否やもつと心理學的、倫理學的見地からと云つたやうに、考察して參りますと、愈々右の推理推論は、確定的な內容と決定的な斷案とを有つものと爲りますが、然し時間の都合上それらは後日に讓る外はありません。

要するに我カトリク敎の敎ふる所に從ひますると、世が開ければ開けるほど、科學其

他の學問が深く明るく爲れば爲るほど、而して人間が生半學者でなく、眞個の學者に爲れば爲るほど、神樣に對する信仰は堅固になり、明晰に爲つて參ります。從つて我國體觀念の基本元則を爲す所の天授神聖なる大權、神樣の存在を基礎とする所の我國家主權の出所由來も、彌々以て公明正大なものと爲る筈であります。それは恁う云ふ神樣だつたら、而して恁う云ふ神樣から授けらるゝ權威だつたら、何時如何なるものゝ前にも、斷じてその權能を危ぶまれる憂は無いからであります。

今一つ、科學を尙善く研究しますると、萬物の第一原因は

唯一絶對であらねばならぬ

と云ふ事、卽ち眞の神樣と云ふは、唯だ一つよりあられないものと云ふ事も、すつかり分つて參ります。何故か、それは科學で以て世界萬物を調べて御覽なさるが可い、何處に往つても、何を調べても、その法則は皆な一に歸する、一筋だと分る。例へば水の法則を御覽なさい、空氣の法則を御覽なさい、光、熱、電氣の法則を御覽なさい。宇宙間

到る處、その法則は皆な同一であります、この地球ばかりでない、かの大陽、月、星などの所謂大千世界に在ても、その法則に差異はない、だから學者はこの地球で得た所の經驗や法則を、そのまゝ應用して、大陽、月、星などの世界を研究する、否や其れば かりか、この天體地球の大千世界を總括する廣大無邊な宇宙萬物も、實は電子或はエレクトロンと稱せられる唯一原素から、その離合化合の形式によりて、之が種々相を生じ來つたものだと、今日の科學は敎ふるのであります。さあ斯樣に萬物の下地を爲す所の原素も一つ、萬物の組織秩序を形づくる所の法則も、天下東西を通じて一つだと、判つたならば、什麼しても之が原因であり、造主である所の神は、唯一でなくてはならぬ。

卽ち

造つたものが一つだから規則が一つ

なのだと、合點が利く筈であります。從つて神樣には、東洋の神樣だの、西洋の神樣だの云ふ樣な事はあられない、科學書の一頁でも讀んだ事のある日本人は、決して神樣が

日本のものであるとか、或は外國のものであるとか申す樣な、目先の利かぬ、馬鹿げた事は曰ない筈であります。

そこで日本精神及びカトリク敎の概念が、お判りに爲つたならば、今ま簡單に右兩者の關係を申上げて、お話を終り度いと存じます。

（三）

抑も我日本精神の立脚點とは

第一、神樣を信仰する事だ、而してその神樣から我皇室の大權が授けられたとの確信を以て、その大權を擁護せんが爲に、身命を献ぐる事だ

と申しましたが、カトリク敎の敎ふる所正しく其れであります。斷然其れであります、寸分違はない、右に就きてカトリク敎の聖典である所の聖書の明文をお聽き下さいませ。

「人各々上に立てる諸權に服すべし、蓋し權にして神より出でざるはなく、現に在る所の權は、神より定められたるものなり、故に權に逆らふ人は、神の定めに逆らひ、逆らう人は己に罪を得、君主等を懼るべきは、善き業の爲に非ずして惡き業の爲なり、汝權を懼れざらんと欲するか、善を行へ、然らば彼より譽を得べし、其は汝を益せんための神の役者なればなり、然れば服從する事は、汝等に必要にして、啻に怒の爲のみならず、亦良心の爲なり、蓋し汝等は亦之が爲に稅を納む、其は神の役者にして之が爲に務むればなり、（羅馬書、一三の一以下）……『汝等、主權者として帝王に服し又惡人を罰して善人を賞せんが爲に帝王より遣はされたるものとして、凡ての官吏に服せよ……神を畏れ奉り、帝王を尊べ』（ペトロ前書二の一三以下）

云々とあります、皆樣、悉く此れ黄金の文字ではありませんか、世には國家社會を論じた大文章も尠くはないが、而もこの聖書の文面以上のものを、我等は何處にも發見し能はないでありませう。恐らく右章句だけを以てしても（無論此れ以外にも、聖書には國家思想、愛國觀念を皷吹した文章は、幾ヶ所にも見出される）聖書が世界の大寶典たるの價値は充分だと首肯かれませう、「諸の權は神より出づる」「權にして神より出でざる

はない」と云ふは、正に「我皇室の大權は天授神聖だ」と云ふのと、全く同意同義ではありませんか、「故に權に逆らふ人は、神の定めに逆らひ、逆らふ人は己に罪を得」とあるは、正に我憲法の條文に「天皇は神聖にして侵す可からず」とあるのと、全く無二無縫の聖訓ではありませんか、而も「雷に怒の爲のみならず、亦良心の爲なり」とあります。卽ら臣民の君上に對する服從や忠誠は、單なる表面的な其れであつてはならない、己が良心に鑑みて、神明の尊前に僞りなく、欺むく事なきものでなくてはならない。でないと「罪を得」と云ふ、卽ち天地神明の前に救はれない人間に爲つて了ふ、と云ふのであります。恁うなると、國家民衆の上に位する君王の權威と云ふは、實に偉大なものではありませんか、君の前に罪を得るは乃ち神の御前に罪を得る所以で、我國の如きに在ては、天皇に對する叛逆罪は、直ちに神造物主に對する叛逆罪と爲る譯なのであります。此れでは如何にも我國民が、天皇陛下を「現神」だとする信念こそ、洵に尤もな道理に差ひない、蓋し　陛下は實に

神の聖なる權利の代表者且つ體現者

で在しますからであります。こゝに天皇の大權が、神聖犯す可からずと爲す道理が、至極明白に爲る。斯くてこそ我國體の本義は、正に大磐石の信念として、世界萬民の前に、何憚るを要しない公明正大なものと爲るのであります。

神の使徒パウロが、右の文章を書送りましたのは、當時全世界の上に君臨して居た羅馬大帝國の市民に宛たものでありましたが、不幸にしてかのローマ國民は、徒らに物質文化の夢に溺れ、怪しげな偶像崇拜などに迷ひ込んで居て、この偉大なる眞理信念をば受入れるだけの聰明さがなく、國家民族双つながら滅亡の悲哀に終つたのであります。我國に在ても今日の時勢を救ふには、早や偶像では可けない、今日の時勢を救ふに足りるだけの明るい信念を、民衆に與ふるが、何よりも肝要だと知らねばなりませぬ

第二、我日本精神の觀念內容として
祖先の靈に對する敬虔及び奉仕

があると申しました、我等の國家は、祖先の血と涙とによりて築かれた尊榮なる遺產であります、祖先の靈は永久に存して、我等の國家をば護つて居られる、我等子孫の上に温き目を瞠つて居られる。若しかこの國家に事があつたら、祖先の靈を祭る所以さへなく爲るでないかと、如此く己が祖先を思ふ熱烈火の如き信念があればこそ、我等國民は、この國家に一旦緩急あるの日、潔くその身命をば拋つのであります。この信念、人は死んでも靈は滅せずとのこの信念、此れこそ實にカトリク敎の敎義そつくりではありませんか、カトリク敎は實に靈魂の宗敎だと云つても、過言ではありませぬ。人間は決して單なる物質や肉體ばかりではないぞ、善人も、惡人も、忠義なものも、不忠なものも、死にさへしたら最後と爲るのではないぞ、不滅の靈があるのだ、亡びない魂魄と云ふがあるのだ、この肉の體はよし死んで、亡んで了つたとあつても、靈は永久に存し

て、己が現世で行つた業の善惡に準じて、善き業には善き報が、惡しき業には惡しき報が當がはれるのだ、善因善果、惡因惡果は、人が死んで、棺を覆ふてこそ確定するのだ正義のため、忠義のためには、死んでも死なゝいぞ、死んでも生るぞと云ふ、此れ實に我日本精神の依つて以て立つ所以なると同時に、亦カトリク敎の基礎觀念を成す所のものであります。

一體人間とは何かと云ふに、それは

靈と肉との合せ物

であつて、この靈と肉と相爭ふ所より、人間生命の內的矛盾が生ずるのであります。即ち肉には肉の欲求があつて、たゞ食はうぞ、飲まふぞ、樂まうぞと云つた禽獸性や本能慾の滿足を、ひたぶるに追求しようとします。斯かる肉慾享樂の一方に耽溺し行くと、人間も禽獸も差別はない事に爲つて了ひます、反之、靈には亦靈の要求があつて、それは眞と善と美と云つた、或は正義、貞操、廉潔、博愛、犧牲と云つた樣な、崇高尊

榮なる憬がれに生きようとするので、そこに人間性の精神的飛躍があり、向上があり、救ひがあり、聖人君子がありと云ふ事に爲るのであります。斯かる意味に於て「肉に從ふ人は肉の人と爲り、靈に從ふ人は靈の人と爲る」とは申します、だから吾等は肉を高調する代りに、靈を高調しなくてはならぬ、肉を紛飾し、美裝する代りに、靈を研磨し、靈を美化し、靈を發揚しなくてはならない、斯かる見地から見まするとき、我國家が靈魂の讃美と祝祭とを以て、國是と致しますのは、最もカトリク教の主旨に近い譯であつて、この靈魂の明るい國民ほど進歩向上の大飛躍、大發展を、未來永劫に期待することが能きるのであります。

實に不滅の靈魂あるを信じ、永遠の生命あるを信ずるものに在ては、現在の果なき生命なぞに、何等の執着を有たない、生も死もたゞ永遠の生命に至らんがための手段だとしか思はない。

最善の死は、最善の生命への進出だ

と信じて居る、恁う云ふ信念を抱いてるものが、如何なる人生の戰場に立ても強いのは當然であります。生死の如きは固より眼中にないのです、だからかのナポレオンなぞがカトリクの軍隊を身方に控へて居た間、百戰百勝、所謂天下の常勝軍で、歐州全土を風靡し得て餘りあつたのですが、彼が一たび功成り、心奢りて教會を迫害したり、法王を監禁したり致した爲に、カトリク側の支持を失つてからは、哀れ敗軍の將として、再起の力もなく、セント、ヘレナの一孤島に、空しく己が末路を歎くの外なきに終つたではありませんか。近く歐州大戰に於きましてもかの獨逸の大軍が潮流の如くに押寄せ來つて、フランスはその首都巴里危しとまで爲つた時、この勝ち誇れる大軍をば、猛然邀へ擊つて數十里の外に驅逐し、而して聯合軍の爲に最後の勝利を贏ち得させたのは、人も知るかの最高司令官のフォッシュ元帥を始め、ペタン將軍、カステルノ參謀總長、マンジアン將軍及び英軍のヘイグ元帥など、皆な熱心なカトリク信仰者だつたと云ふではありませんか、永遠の生命を信ずるものは、實に強い、偉い、と云ふ事が首肯かれるでありませう。

皆樣、我等は今日、何も殊更に牽强附會の說を設けて國民を愚にしなくても可い、たゞ造物主なる唯一絕對の神樣が、我皇室の上に、國家統治の大權をお授けに爲つて居られる、天皇は現神だと云ふ、この明白な道理、この眼前の事實を、正直に認め得たゞけで、我國體の尊嚴を確保し、國民全體の思想觀念を統制して、目下の思想國難を突破するのは、實に易々たる事だと信ずるのであります。

聰明なる我國民は既に一たびかの明治維新の大改革を斷行して、力の混亂より脫出し得た貴重な體驗を有つてます筈です、實にその當時我國內は、數百に餘る大名小名などの群小國家が、獨立的に割據分裂して居まして、混亂に混亂を重ねて居たのでしたが、一たび宇內の大勢に目醒めたる國民は、何百年來の行掛りをば、斷然とかなぐり棄て、幾多の利害因緣を超越しまして、正に擧國一致、尊嚴なる皇室の大權下に、大同團結の實を擧げたのでありました。之が爲めにかの何百萬石、何十萬石の廣大な封土と、それに附隨した臣下臣屬を擧げて、事もなげに投出し得た大小名たちの見識も然る事ながら、それを又潔よく投出させるに成功した國民の聰明さも、固より普通の聰明さではない、正に奇蹟だ、奇蹟的聰明さだと謂はねばなりませぬ。而も夫れで日本は始めて日本らしく爲つた、否や世界に於ける大日本と爲つた、而して國家形體上の統一が出來

勢力の混亂と紛糾とより救はれた

のであります。

斯樣に大小名などの群小國家、此等の權威者ならぬ權威者、君ならぬ君たちが全廢され、皇室の神聖權に對する認識が明かにされて、茲に始めて國家形體上の統一が完成されましたやうに、今日學者や賢者など呼ばれる人たちの小我觀に立脚した雜多の主義、主張、神ならぬ神々を對象とする迷信や妄說や云ふ如き群小思想をば一掃しまして、造物主なる眞の神の大御心を基調とする永遠的信仰の大權威下に、國民全體の思想觀念がリードされ、統一されるに到りて、そこに始めて我等は今日の

思想的混亂と紛糾とより

救はれる事とは爲るのであります。この思想的維新こそ實に光輝ある我國體の上に、更に一段の光彩と榮譽とを加ふべきを信じて疑ひません。

什麽しても神樣から授かつた大權を活かすのには、その神樣がしつかりした、神樣らしい神樣でなくてはならない、その神樣が單なる人間の燒直しであつたり、或は禽獸動物の變化姿であつたり、若くは岩石や樹木などの徵生へたものであつたりしたのでは、蒙昧時代の民衆は免も角、到底今日の文明人士に命令する資格はあられないからであります。かの明治の日本國民が、何百年來の陋見を離れて、政治的維新に成功した聰明さを顧みるとき、昭和聖代の同じ日本國民が、未だに舊來の迷信や僻見に囚はれて、竟にこの意義深き思想的維新に失敗したとあつては、全く父祖の靈に濟まない。不肖の誹りを免れないと謂はねばなりますまい。

否や不肖の誹り位は未だしも、かの徒らに己が妄執我見を振翳して、信仰の是非を辨へようともせず、たゞ自分と宗教が差ふから、たゞ自分と同じ宮や寺に參詣しないから、更に自分と同じく祭典や踊りやのお節介をしないからと云つて、直ちに自分以外

の宗教信者等の國賊呼はりを爲し、非國民扱ひを爲し、或は之を白眼視し危險視して、人と人と相疑はしめ、國民と國民と相鬩がしむる樣なことをしながら、夫れで自から愛國者氣取りして得々たる如き、實に沙汰の限りではありますまいか。

國には軍人もあれば商人もあります、農民もあれば職人もありますが、皆な夫れ〴〵の立場から、即ち軍人は軍人として、商人は商人として、更に農民職人は亦農民職人として、國家に對する奉公と忠誠を完うすべく相勵んで居ります。同樣に精神的方面に在ては、今日我國には神道信者があり、佛教信者があり、更にカトリク信者、基督信者と稱せられるがあります。而も皆な其れ〴〵の信仰信念に立脚しながら、國家に忠なる所以を學び、國民意識の徹底を圖つて居る筈なのであります。且つ、

そが祭祠祝典を營む

に當りましても、或は死者や祖先のために祈願する場合にも、各宗教に認定された寺院や、教會や、天主堂に於て、之を爲して差支へない筈であります。それはかの文武兼備

の大聖に在しました　明治大帝が國民相互の和合のために、日本の同胞たち皆が仲睦じく樂しく、生きて暮して行かれますために、信仰の自由と云ふ事を、憲法の上にお定め下さつた御趣旨、御叡慮に鑑みまして、是非然うなくてはならぬ事と、思はれるのであります。それを今更、かの一部の國粹者たち、神道者たちが、否や學校の教員たちまでが、是が非でも神道者の如くならなければ、宮や寺に參拜するでなければ、而してそのお祭禮に與かつて踊つたり、酒飲んだり、藝者見物をしたり、御輿擔いで喧嘩したりするでなければ、非國民だ、スパイだ、賣國奴だなどと誣ひて、故らに國民相互の平和を傷ける、風なきに風を起し、波なきに波を立てる樣な眞似をする。此れは例へば軍人があつて、軍人ならぬもの、軍人の如くに砲術の教練をしたり、飛行戰術を習つたり、機關銃の打方を覺えたりしないものは、皆な非國民だ、賣國奴だと云ふが如くで、斯かる、野暮な、偏狹な、且つ不見識な事はないと謂はねばなりませぬ、

我等の日本精神とは

もつと廣く大きく、自他相救ふと云ふ大乘的な心意氣でこそあるべきだと信ずるのであります。

最後に申添へて置き度い事は、凡て永遠性の建設は、永遠性の信念によりて完成されると云ふ事であります。かの偶像の如きは、文化が向上し、知識が徹底して來ればどし〳〵廢されて行くのです。我等は斷じて日本國體を偶像化してはならぬ、それではやがて廢れ行く運命の下に置かれるからであります。

實に我等大和民族の理想が、單に日本や東洋に平和を齎らすばかりでなく、全世界の上に王道を立て、平和を建設するに在りとすれば、屑々たる民族根性を排し、高明な信念を高く揭げて、世界人類の心を把握するの覺悟がなくてはなりませぬ、此れが乃ち

我等の思想的維新

を完成する所以であり、同時に我等の祖先に忠なる所以だと信ずるのであります。

おゝ國民よ、我等は今一度、明治大帝の御誓文に仰がれる

舊來の陋習を破り、天地の
公道に基づく

との御叡慮に就き、再思三省し奉るべき必要がないでありませうか。（終り）

附錄に序して

身を守り、家を守り、國を守るは、人間生存上の三大要件である、身を守れなければ罪の子と爲り、家を守れなければ破產兒と爲り、國を守れなければ亡國の民と爲る、此れ皆な社會人類の大患だ。

我等は身を守るべく、信念修業の人たるを要すると同時に、亦家と國とを守るべく、和合奮鬪の民たらねばならない。

予は固より軍人でない、而も我皇國の軍人たちが、身を鴻毛の輕き思ひして、國家に殉せんとする熱烈火の如き心膽に、及び聰明神の如き精神に、感銘するや久矣、彼等は事物の苟くも國威國力の發揚に資すべきものは、その內國產のものなると、或は外國製のものなるとを問はない、飛行機も戰艦も、或は裝甲車機關銃、瓦斯も電力も、全世界に於ける一切の新發見を、日一日と取入れ、之を消化し活用して、時局の急に應ぜんと努めて居るのだ、然るに世の宗敎論者の如き、國粹論者の如き、自から國民の精神的指

導に任ずると稱しながら、未だに宗教や神樣の外來品呼はりに專らで食はず嫌ひの性僻に甘んじ、眞に國民の心的向上に資すべき幾多の道義的資源を拋棄し、否や拒否して顧みない偏狹さ加減は、竟に國民の思想信念を統制すべき時代的背景をすら空うして、思想國難を激成するに到らんも測られざるべく、吾人の斷じて與みし能はない所である。

我等は今一度、大和民族の大和心に反省するの要がある、而して軍人たちが身命を賭して外部に建設する所のものを、我等は內部に就きて完成すべく、健全なる思想信念の、國民を啓發するに足るべきものは、その外來たると內在たるとに論なくすべて之を消化し、同化して、精神的に結合し、更生し、且つ向上せねばならぬ、こゝに精神的維新の提唱ある所以である。

昭和十年二月二十二日誌す

附錄

思想的維新に到るまで

(一) 萬邦を友に

日本には今ま幾んど一個の友邦らしき友邦もない、友邦がなくとも日本は日本で生きて行く、此れが日本の誇りだと云ふなら、それも可い、が然し飜つて日本が世界で生き、世界が日本で生きるまでに太く遠く擴がり得られるのも滿更ではない筈、

日本の理想は固より、世界を對手に爭ふ事でなくて、世界の平和を樹立するに在る、それも强ち己が利害休戚を顧みて然するのではない、日本は古來名實共に東洋の君子國だ、安んずれば乃ち正義に於てし、爭ふも亦正義に於てする

古への人は日本全國を統一するがために、全國民の心を捉ふることを知つて居た、之に比べると現代人は聊か狹量短見なるかに見ゆる、余りに傳統に囚はれ、舊習に泥み、而して大局を達觀して大勢を善導するの明がないかに思はれる

我等は世界萬邦を友たらしむべく、世界萬民の心を捉へねばならぬ、日本をして世界に大ならしむる所以は、たゞ是れあるのみだ

（二）世界歴史中の最大傑作

お國自慢を言ふでないが、古來日本人は奇蹟的な位、聰明な途を歩んだ、特に明治初頭宇内の大勢を察し、斷然起つて、何百年來の行かかりを抛擲し、幾多の利害因縁を超越して、擧國一致、皇室の神聖權下に、大同團結の實を擧ぐるに至つた如き、全く世界歴史中の最大傑作でないか、苦しも日本が當時、王政復古、廢藩置縣などの大改革を斷行して、開國進取の國是を確立し能はなかつたものなら、今日そが運命は、果して什麼だつたらう？、而も之がために、如何ばかり夥しき志士先覺の血と骨とを要せし事ぞ、吾人は今更ながら、此等の志士先覺に對し、滿腔の感謝と敬意とを表せずして止む能はぬ。

とは云へ、政體的維新は、思想的維新を伴はないでは、恐らく空中の樓閣たるに過ぎない。

かの羅馬大帝國は、羅馬人の自覺によりて出來上つたが、然し思想的背景がなく、基礎的信念に於て缺ぐる所ありしが爲に、出來上つた時は、既に土崩瓦解の時であつた。

（三）高天ケ原の神話

古へ我國には、高天ケ原の神話に由來して、皇室の神聖權に對する民族的信念があつた、然し神話では單に原治時代をリードするに足りる程度のものたるに過ぎなかつた、從つて一たび儒道を迎へて疑惑を生じ、二たび佛教渡來に逢うて破綻を來し、三たび武家の威壓的勢力に觸れて動搖し、遂に現今、舶來思想の澎湃たる激流に捲かれて大混亂に陥つたのである。

神話の骨子は、祖國愛の醇正と、統治權の神聖とを啓示し强調せんとしたものだ、建國の越旨宣言として、天晴な標識でないか、我等はこの趣旨精神を穿違へてはならない。

（四）神孫、現神

祖國愛は、其れ自から正しいとは云へ、之をして絶對的權威あらしむるには、絶對者なる神の至上權威に、其を結合させるの要がある、未だ哲學的に、或は神學的に、造物主の唯一絶對性を、證覺し能はなかつた太古の民衆のために、神話が八百萬神の

衆團的勢力

を藉り來つて、祖國愛の主張を重からしめようと、努めたのは、亦己むを得ない手段方式であつたと謂はねばならぬ。

斯くて吾國民の祖國愛は、神明の加護てふ背景の下に、皇室の神聖權の意識と爲り、神國の理想と爲り、國家至上主義の信念となつたのである。

斯かる傾向は、强ち我大和民族の歴史にのみ見らるゝ事でなく、古來帝國主義の統治形式に立脚せる國家は、バビロニアの如き、埃及の如き、羅馬大帝國の如き、皆な然りで、此等の國々に在ては、皇帝即神であり、神子神孫であり現神其者であつた。

而も不思義な事は、斯かる國々（我國を除く）が、皆な枕を並べて亡び失せた事だ、如何なる理由ぞ。我等は茲に深く沈思熟考するの要がある。

（五）儒道外來思想

外國から初めて、思想界の魁として、日本に來たのは、儒道であつた。

後世、程朱學、陽明學などを云爲するものは別として、儒道本來の趣旨は、人倫五常の實踐躬行によりて、治國平天下の理想を實現するに在つた、仁義と云ひ、忠孝と云ふが、その骨子なのだ。

儒道は大陸を背景として、幾多民族の間に說かれたので、地方色に淡であり、民族的觀念によりも、人道の實際化に、重きを置いてある故、神道の祖國愛に矛盾すべき何等の素質を含んで居なかつたと云へよう、案外仲よく行つたものだ。

然しながら、我國體觀念の綱領たる祖國愛と、皇室中心主義との上から觀ずるとき、

儒道の教義は、甚だ不徹底の嫌ひなきを得ない、例せば、君仁義を賊へば一夫に墮す（孟子）と論ずるが如き、臣諫めて聽かれずば、仕を辭して去れと誨ふるが如き、我國の武士道や、臣節の絶對的なるに比して、固より同日の論でない、斯かる不純浮薄な論議のために、後世忠と孝との撰擇に迷ふものを生じ、皇室に對する神聖觀念を薄らげて不執禍亂の因を作る所なかりしか、詮思の餘地なきにあらず。

とは云へ、儒學と國學とは次第に深く結び、碩儒中偉大なる愛國尊王の士を輩出させるに至つた、淺見綱齋、山崎闇齋などの巨擘を治め、水戸學派の者にして、遠く近く王政復古の大業に、寄與貢献せしもの尠くはない。

（六）佛　教

次いで來たのが、佛教だ、佛教の日本に於ける功罪は、別に論ずる人があるだらう、但だ佛教渡來によりて、平穩だつた日本の空氣は、乍ち颱風の襲來に逢つたかの如き大混亂に陷つた、夫れまで我國には、八百萬神を後楯とせる天照皇大神と、そが天津世嗣と呼ばせ給へる皇室との外には、尊崇すべき何物もなかつた、然るに佛教は始めて、我國に舶來の本尊を持込んだのである。而して之が歸依者亦、次第に侮る可からざる勢力を形くるに至つたのである。

於是乎高天ヶ原の國津神を謳歌せんとする國粹派と、舶來の本尊佛に歸命せんとする進歩派との間に、激烈なる葛藤を惹起するに至つたのは、固より己むなき事態であつた物部氏對蘇我氏の軋轢爭鬪が其れである。その結果、蘇我氏の如きは畏多くも至上を弑し奉るの大逆をさへ敢てするに至つた、思ふに、天武天正より戰國時代を經て明治維新に至るまでの相次ぐ內亂叛鬪の伏線は全く茲に在つたと謂はねばならぬ。

今日國粹保守派對基督教の紛糾が、如何に困難且つ重大に見ゆるとも、之を當時の神道對佛教の其れに比べたなら、幾んど問題でない、蓋し基督者は、斷々乎としてその眞理を主張する以外、迫害者に對しては常に無抵抗主義を堅持するからである。

（七）弱小思想の汎濫

神道對佛敎の葛藤の由て來る所は、國神崇拜と佛像崇拜との衝突であつた、無論國神を崇拜する者にも、或は佛像を崇仰するものにも、末だ之を崇仰するに就きての內面的理解とか、哲學的論議とかはなかつた、ただ保守派には古いのが、進步派には新しいのが難有いと云ふ以外の何物もなかつた、從つてその相爭ふや、論議は拔きに、直ちに腕力沙汰と爲り戰鬪殺戮と爲るを免れなかつた。

而も戰鬪や殺戮で、思想信念の勝敗が定まる譯ではない、爭つて爭ひ飽き、殺して殺し盡きた後には、思想的萠芽は、鬱勃として發生し來つた、而も神道未だ佛說を論破するに足らず。佛敎未だ神說を壓服するに足らず、その間に在つて、孔孟老莊揚墨百家の說、孰れも凡鄙奇矯放膽空漠取り〴〵の論議を恣にして、底止する所なき有樣と爲つた。思想は思想を以て統制さるべきであるが、而も孰れの思想も不羈不束に終始し、收拾する所以が無かつたのである、恰かも思想界の群雄割據と云つた狀態であつた。

弱小國の群は、天下の大患であるやうに、弱小思想の汎濫は、國家社會を破滅紊亂に導く。

(八) 思想の統制

國家の統一が、有力な權威の出現によりて、完ふさるゝが如くに、思想の統制も亦、內容充實せる思想的權威の確立を俟つて、始めて實現される。

我等は固より思想のファッショ化を叫ぶものでない、然れど亦、無軌放恣な言論自由を、謳歌せんとするものでもない。

能ふ事何でも爲して可いと云ふ法があられないならば、思ふ事何でも言つて可いとの法もあられない筈だ。言論の社會に及ぼす影響は、行爲の其れにも增して、重大な場合さへあるでないか。

吾人は相互にその幸福平安を尊重し、相互にその迷惑害惡を警戒する事によりて、社會全體の安寧秩序を維持し能ふ、國家の存立を承認する限り、國家に累を來すべき言語動作を、排除すべきは當然である。

とは云へ、國家が安に不法な壓迫を加へて、個人の權利を侵害するも亦、許す可から

ざる罪惡だとせねばならぬ、この故に、萬民皆な暴君虐王の治下に立つを屑しとしないのである。

於是乎國家は、其基礎原理に於て、公正な信條を確立し、その行政機構に於て安全な性能を賦與されねばならぬ。

國家成立の信條たるべき基礎原理の公明にして鞏固なほど、民衆の國家に對する信賴は厚くなり、そが統治機構は、強く貴く仰がれる、所謂嚴肅神聖なる國體觀念とは、斯かる堅實な基礎信條の上に、聳立する。

蓋しその信條とは、一方統治權に對する神聖觀念であり、一方民衆の福祉安寧を保證すべき公正原理に外ならぬ。

(九) 民衆福祉の公正原理

抑も我國に在ては、民衆の福祉安寧を保證すべき公正原理として、明治維新に際し、聖上御躬から天地神明の前に、五箇條の御誓文を宣らせ給うた。

一、廣く會議を興し萬機公論に決すべし。

二、上下心を一にして盛に經綸を行ふべし。

三、官武一途、庶民に至る迄、各其の志を遂げ、人心をして倦まざらしめん事を要す。

四、舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。

五、智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。

這は實に皇國未曾有の大變革を成し給ふべく、公明不動の國是を確立し給ふたのであつた、試みに右五箇條の精神を拜察し奉るに、「萬機公論に決すべし」と宣ひ、「官武一途、庶民に至る迄、各其志を遂げさせんと宣ひ、凡そ皇權の發動行使が、悉く國利民福を基調とし、主眼とすべきであつて、斷じて從來の如くに、政權を以て一部特權階級の私利私福の具たらしむ可からざる所以を、明かにせられたものに外ならなかつたのである。

茲に至つて、皇室の大權は、最早單なる皇室の大權でなく、正しく民衆のための大權

であり、民衆自からの大權と爲つたのである。吾人國民が今日、皇室の至上權に衷心より感激感銘し奉る所以のもの、全く茲に在て存する、斯くて皇權の發揚强化は、直ちに國利民福其物の發揚强化と爲り、眞個に

君民一如、上下一心

の寰宇無比なる國體が、出來上がつたのである、されば國民が常に身命を賭して、皇權の擁護に膺り、一死以て報國盡忠の大義に殉ぜんとするも、亦宜なりと謂はねばならぬ

思ふに歴代の天皇が、國家民衆を勞はり、軫念措かせ給ばざりし大御心のほどは、古今を通じて渝らせ給はなかつた筈である。但だ明治大帝は武家權門が妄りに袞衣の袖に匿れて、政權を壟壇せるの弊を矯め、皇權の公正を昭かにして、之をそが本義本筋に反へらしめ給ふたに外ならぬ。

（一〇）明治維新の遺漏缺陷

而も王政維新は、我國體觀念を明かにして、之をそが本義本筋に反へらせたとは云へ尙ほ一つの極めて重要且つ根本的な遺漏缺陷があつた事を、見逃すべくもない。遺漏缺陷とは外でない。思想的重點を置くべき神明の加護てふ基礎信念の上に、時代的背景がなく、科學的根底を缺如せるの一事である。

我國情を按ずるに、建國以來既に二千六百年の長き星霜を閲し來つて居る。而してそが外形的文化の今昔を比較するに、實に夢現雲壤も啻ならぬ、近く明治維新時の日本と現時の日本とを較するさへ、そが變化の己甚しき、全く驚心駭魄の極みではないか、然るに見よ、我が「神明の加護」てふ基礎信念の背景に至つては、未だにかの高天ヶ原の八百萬神を措いてはあられない始末でないか。

時は移り、物は長ずる、而して凡有るものは、外殼の完成に伴れて、亦內部の生命も充實せねばならぬ、成長すべくして成長しないと、畸形と爲り、廢物と爲るに終る、故に御聖勅には「舊來の陋習を破り、天地の公道に基づくべし」と、宣らせ給うた、德富蘇峯氏は右御詔文を贊し奉りて

「此れが維新大改革の中樞だ、長き歴史ある國民は、動もすれば其の歴史に拘り囚はれて、其の歴史の最も不必要の部分、最も有害の部分、即ち過去の糟粕とか、塵垢とか云ふ部分に執着するものである、故に建國の大精神に顧みて之を一洗するの必要を生ずる、如何なる家に於ても、一年に一回乃至兩回の大掃除は、必須である、況や國に於てをや、復況や其國が數百年來鎖國の狀態に停滯したるに於てをや、茲に天地の公道と特書せられたるは、單に一國一州の舊例故慣を殊守せず、進んで世界共通、人類總體の奉じて以て、公道と爲す所を、正視濶歩す可きを示し給ふたるもの」云々と言つてある。寔に至言である

不幸、明治維新に在ては、一に物質文化の更新に急であつて、そが精神的更生を顧みるに遑がなく、ために形態的文化の急激なる伸張發展に拘らず、そが精神的内容に至つては、全く進歩向上の跡がない、そこに物質偏重の氣風が醞釀され、上下を通じて思想惡化の大危機を招來するに至つたのである。

（一一）精神の啓發期

思ふに、我が明治維新に際し、上に聖明の天子あり、下に大西郷の如き政界の偉人があつて、國家の政治形體の上に不世出の大手腕を揮ひ、以て明治大帝國を出現させ得たやうに、若しもパウロの如き大宗教家、ソクラテスの如き大哲學者があつて、國民の思想信念の上に時代的な大革新を斷行し得たりしならば、今日の思想惡化、風儀擾亂の如き、優に之を豫防し統制し得たに差いあるまい、されど人間に在ては、形體の發達を俟つて、然後精神の啓發期に入るが、自然の順序とも云へよう、嬰兒長じて七八才に到るまでは、概ね靈的及び精神的活動を爲す事は能きない、七才にして纔かに善惡を辨別すと稱せらる、されば國家に在ても、外部の政治形體が畧ぼ完成せりと思はれる現時に追んで却て内部に於ける思想的危機の發生を見るは、恐らく當然な成行きだと謂ふべきであらう。

（一二）八百萬神の神籍奉還

顧るに國家の政治的統制が、封建制の撤廢と、無數大小名の版籍奉還によりて、實現せられたやうに、そが思想的大改革、及び信念的大統制は、必ず迷妄信の撤廢と、八百萬神の神籍奉還とによりて、實現せられねばならぬ、全國家を打つて一丸と爲すべき天皇制の下に在ては、大小名の割據分裂は、百害あつて一利なきが如くに、國民全體の精神を、總合融和せんとする大理想の下に在ては、神々の對立、及び迷妄信の跋扈ほど、厄介且つ有害なるはあられないからである。

我等は政治的に、唯一無比なる皇室の大權下に一致團結するが如くに、信念的には、唯一絶對なる造物主の大信念下に結束協同すべきである。

ここに我等が、我等の心を活す所以があり、同時に世界人類の心を活し且つ把握する所以がある。（終り）

昭和十年三月二十三日印刷
昭和十年三月二十五日發行

定價拾五錢

著作兼發行者　長崎縣佐世保市三浦町三十六番地　脇田登摩
印刷者　神戸市林田區五番町七丁目六〇　臼井朝市
印刷所　神戸市林田區五番町七丁目六〇　明星舍印刷所

發行所　佐世保市三浦町三十六番地　カトリク教會

終